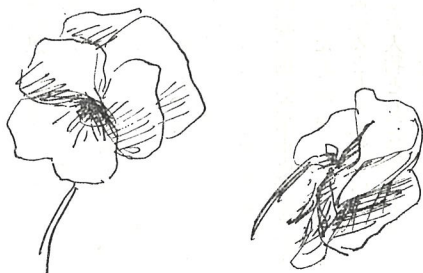


《座 談 会》

同志社生活をふりかえって



《司 会》 岡 満 男 (毎日新聞社京都支局長)

《出 席 者》 (発言順)

池 田 晃 (法学部 4 年)	谷 口 和 男 (神学部 4 年)
小 杉 宏 子 (女子大学芸学部 4 年)	張 美 知 子 (女子大家政学部 4 年)
和 田 豊 司 (工学部修士課程)	中 村 恵 美 子 (文学部 4 年)
木 村 博 一 (法学部 4 年)	

(1970年1月28日)

自 己 紹 介

岡 きょうは、この春同志社を巣立つ方々から、学生生活をふり返っていただいて、同志社についての、なるべく具体的な感想なりご意見なりを、いろいろお聞きしたいと思うんです。そして、そのなかから新しい同志社像を考える材料が汲み取れたら、きょうの座談会は、実りのあつたものということになります。

最初に、自己紹介からいたしたいと思います。私は毎日新聞京都支局長の岡満男です。出身は京都大学の法学部です。私のワイフは同志社女專のころの家政科の出身です。私の二人の息子のうち一人は、いま岩倉の高校の一年に在学しております。私のワイフの祖父は、明治二十四年に同志社普通学校を卒業しました。その前年の明治二十三年に新島襄先生がなくなり、そのひつぎを京都駅から若王子の墓地までかついだ一人だったそうです。その祖父は、昭和二十一年に七十いくつかでなくなつたのですけれども、生きているあいだ、日本で子女の教育の場は同志社以外にないというひじょうに強い信念をもっていたのです。祖父が考えた同志社といまの同志社の姿とは、私はいibunへだたりがあると思うんですけども、私はなんとか祖父の遺志をつぎたくて、息子の一人を同志社に学ばせているわけです。また私自身京都で学生生活を送って、同志社というものを外から眺めていて、ほかの大学にないよさを感じるのです。同時にまた甘さというものも感じる。そういうこともきょうの

お話のなかでいろいろ出していただきたいと思っ
思っんです。

それでは私の隣の池田君から自己紹介を
お願いします。

池田 法学部四年の池田です。多くの場合
は、大学生活は体育会に始まって体育会で終
わったという感じで、授業のことはさっぱり
頭に入っておりません。それで体育会的なこ
としかしやべれないかもしれないですね。出
身校は富山県立氷見高等学校です。

谷口 神学部四年の谷口です。中・高校は
香里ですから、同志社生活は、すでに十年間
になります。大学院に入って、ドクターにで



岡 満 男 氏

も進んだら、もっと長くなるわけです。ただ
よく自身は、はじめから一つの問題意識をも
って大学に入ったので、それを追究していく
ことで四年間を過ごしてきたわけですけれど
も、その問題意識はこれからも続くでしょう
し、それを続けていくつもりであります。

小杉 女子大学の英文学科四年に在籍して
おります。クラブの聖歌隊であれやこれやと
羽を伸ばして四年間過ごしてきたわけです。
いろんなことをかじって、結局全部が中途半
ばに終わったような感じがしますけれども、少
なくともあと一年は宗教主任の研究助手とし
て大学に残ることになりました。

張 女子大学の家政学部に在学しておりま
す。私は、女子中学、女子高校、女子大学と
女性ばかりの学校で育ってきたわけですけれ
ども、クラブまでがガールスカウトで、女の
子ばかりの間で過ごしてきたわけです。私の
場合は、ぜひ栄養士の資格を取りたいと思っ
て学校に入ったわけですが、なかなか職場が
なくて、せっかく取った資格も生かせないの
は残念だなと思っております。

和田 工学部修士課程二年です。ばくも池
田君と同じで、大学時代は体育会で運動しか

知らなかったのですけれども、四年のころか
ら研究室に入りまして、多少勉強がおもしろ
くなったのと、自分が四年間でやったことを
生かすためには、ぜひとも大学院にいかなく
ればできないと思ひまして、二年余分にいつ
たわけです。最近になって勉強のおもしろさ
からいろんな社会的な問題に関心が移ってき
つつあって、これから社会に出るわけですけ
れども、自分がどうなっていくか、いまだに
見当がつかないでいます。愛知県の明和高校
出身です。

中村 文学部文化学科文化史四年です。京
都へ来たのは日本史を勉強したかったから
で、それで日本史の関係のクラブに入りました
けれども、あまり勉強しなくて、日本史の
ほうよりほかの本を読んでいた時間のほうが
ずっと多かったようです。四年間何をしたら
か聞かれたら、本を読んだとしかいえませ
ん。出身校は静岡県立浜松北高校です。

木村 法学部法律学科の四年です。私の場
合は、同志社の共学ばかりのところ中学以
来足かけ十年間お世話になりました。やっと
この春同志社から追い出していただけること
になっております。大学には、谷口さんや中



池 田 晃 君

村さんのように、何かの目的をもって入ってきたのではなく、私の場合は、なんとなく同志社へ入ってきて、なんとなく同志社から出ていくという、いわば平均的同志社人のような生活しかしていなかったと思います。

同志社生活はよかった?!

岡 いま皆さんの自己紹介を聞きますと、十年以上同志社生活を過ごしてこれた人、もう一つは、ほかから京都にやってきて、京都での学生生活を四年間送られた人、いろいろあるわけですね。木村君のように、なんとなく入ってななくという十年間、谷口君のように一つの問題意識をもって入った人、

いろいろさまざまだと思うんですけども、京都での学生生活ということもひっくり返して同志社で生活を送ってよかったと思う点をまず話していただきたいんですが、和田君からでもひとつ……。

和田 ぼくは学部的时候は山岳部にいまして、クラブのいろんな先輩との接触がひじょうに多かったわけですね。とくに山岳部というところは部員が多いからかわからないですけど、人間関係でひじょうによい方に恵まれた。それと、マスプロだといいますが、研究室へ入ってからは、たくさんの先生と接触する機会が与えられ、また別の人間関係も広くなった。そういう点ではぼくはよかったと思います。

池田 ぼくの場合は、一つのクラブとちがい、体育会の委員長をやっておりまして、学生だけでなしに、社会人の方ともいろいろ話ができたということがあげられます。それからスポーツを通して人間と人間とのぶつかり合いですね。なんともいいようのないよさに接したということです。

岡 それは同志社でなければ味わえないものでしょうか。

池田 ぼくは同志社へ入ったから味わえたと思ってあります。ほかの大学へ入ったら、味わえなかったかもしれません。

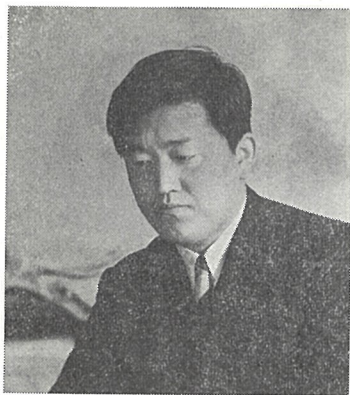
張 私の場合も木村さんと同じように、なんとなく親のすすめで同志社女子中学へ入ったわけですね。その後なんとなく高校に進んで大学はどこにいけるかなと考えて、栄養士のコースなんかが自分の進む方向にいんじゃないかなと考えて、入ったわけです。

岡 中学、高校、大学と女子部で過ごしていく途中で、どこかへ抜け出したいという気持はなかった?

張 一度、中学三年のときに、ほかにかわりたいなと思ったことがあったんですけども、いまになって、かわらなくてよかったと思っています。

岡 谷口君はどうですか。

谷口 ぼく自身も、いつかわろうか、いつかわろうかと思って十年間過ごしてきたような感じがするんです。しかし、自分の問題点を与えてくれたのは同志社だと思ふし、そういう点から見て、自分の進む道、あるいは自分の場というのはやはり大切にしたいと思ふます。



谷口和男君

小杉 私の場合、大学といったらすぐ思い出すのは、自分の属していた聖歌隊というクラブで、そのころ同志社大学と女子大学といっしょになっていたんですね。私が三年の前期に分裂問題が起って、いまは分裂しておりますけれども、現在のキリスト教の問題とか、神学上の問題とか、現役の神学生なんかとの交りを通して、自己の追究といえますか、自分の生き方とか価値観、そういう問題をじかに考えさせられたり、そういうなかを通して一人一人が変わっていったという経験を考えてみたときに、やはり同志社の聖歌隊というところがなかったら、私というものはなかったのじゃないか、そういう

ふうに考えると、ものすごく貴重だったなと思います。

木村 さきほど平均的な同志社人と申し上げたんですけれども、同志社に十年間通って、大学の生活では、私は何も得るものがあったとしたときいろいろありません。しかしいわゆる人格形成期といわれる中学、高校時代を同志社のなかで過ごしてきたということは、現在ふり返ってみると何かを得たのじゃないか。この中学、高校の同志社生活がなかったら、なにかちがった人間になっていたんじゃないかという感じはします。それからもう一つは、大学では、法学研究会へ入りまして、四年間恒例の行事として地方へ無料法律相談にいきました。私のいったのは松山と広島でしたけれども、いままで自分が勉強してきたこと、研究してきたことを、そこで直接一般社会の人々との対話で実証していくといえますか、裏づけていくという機会をもてたこと、それが将来にとってある程度の自信につながっていくのじゃないかと思っております。だいたいその二つが同志社生活から得たよかった点だと思っております。

中村 私が同志社を選んだのは、同志社が

京都にあったからで、同志社の教育方針とかそういうものはべつに考えなかったのです。

私の高校はだいたい受験校なんですけれども、同志社なら入れるだろうくらいで同志社を受けて、それで入ったわけなんです。それでいままでの生活をふり返ってみると、同志社を意識したことは全然なかったのではないかと思います。四年間生活を送ってきて、いちばんよかったなというのは、やはりいい友人を得たということです。私の下宿は同志社の女子学生ばかり三十人ほどいるんです。一つ屋根の下で暮らしていて夜みんなでいろんなことを話をするわけです。人生の問題とか、ちょっと大げさですけども、世界観とか、自分の生き方とか、みな真剣に考えている人が多くて、そのなかでいい友だちを得たということ、それがいちばんよかったと思っております。

岡 いま皆さんの話を聞いてみると、よき友を得られたということ、これが同志社の生活をふりかえっていちばんよかった点ですね。

谷口 ばくの場合は先生にも恵まれました。しかし、中学、高校時代に身につけてき



小 杉 宏 子 さん

たものがほんとうに同志社大学のなかで発揮されたか、また同志社らしいものを受けることができたかといわれたら、首をかしげる以外にないわけです。それはよく自身だけじゃなく、同志社の中学、高校で学んだ人たちの共通の感想だと思います。

岡 同志社というのは、ご存知のとおり一八七五年に新島襄先生が同志社英学校を設立して、だいたい一世紀に近い歴史をもっているわけですね。その一世紀近い歴史をささえてきたものは、一つはキリスト教主義教育だと思えます。ところが大学はだんだんマスプロ化していく。そうすると、いつの間にか新島襄先生の精神がもぬけの殻になるとい

か、形骸化してしまうというか、そういうところがあるのじゃないか。キリスト教主義教育というけれども、それが実際に大学の教室のなかでどの程度のささえになっているのか、そういう点、私ちょっと疑問に思っています。このごろ同志社の学生諸君でも、新島襄っていったいだれなんだというような人がいるということですが、皆さんの考えている新島襄の人物像、人物観をお聞きしたい。

新島襄先生について

谷口 新島襄についてとくに勉強したこともないわけですが、ただ、中学、高校のときに、いろんな形で必ず勉強させられました。それで、ひじょうにりっぱな一面というものはよくいわれるわけです。それと同時に、彼がとくに教会なんかで果たしてきた役割というの、ほんとうの意味で高く評価されるのだろうかということを考えます。新島襄の精神は残りながらも、しかも彼が神格化されることがなかったというのは、新島襄をささえていたキリスト教主義の根源がはっきりしていたからじゃないかと思うんです。

岡 外から入ってきた中村さんにお聞きし

たいいだけれども、中村さんは新島襄をどういうふうに感じ取っておりますか。

中村 私、あまり感じたことはいんです。ただ、同志社大学設立の趣旨とかいうのがありますね。あれを読んで、一国の良心となるべき人々をつくるというところにすごく感心したのです。一国をつくっている人は二、三の英雄ではなくて、知識と品性のある良心をもった人々、その点に私はいちばん感心しております。

和田 ぼくは、新島襄先生自体のやった教育というより、新島襄という人物の個人的な生涯というか、考え方に、最近になって、惚れこんできているんです。日本を脱国してアメリカへ渡ってそこでキリスト教にふれて、はじめて新島先生は教育の問題を考えるようになるのですけれども、普通によくいわれている勇氣とか、反骨精神とか、リベラリズムというか、そういうものを新島先生の生き方のなかに強く感じるようになってきたんです。なぜそれを強く感じるかといえば、最近の大学の方針にそれがなくなってきたから、よけい感じるのかもしれない。いまの同志社がどうして存在していくかということは、



張 美知子 さん

やはり新島襄が考えたことをもう少し追及していくべきで、大学の存在意義というのは、キリスト教主義がどうのこうのということではなく、やはり初心にかえて考え直していかなくちゃいかんとぼくは思っているのですけれどね。

池田 ぼくは中村さんと和田さんの意見をひっくるめたような意見なんです。新島襄先生の書かれた同志社精神、これは知育だけにたよらず、キリスト教主義を中心にした徳育を重んずる大学にしたいということが書いてありますが、その点にもものすごく感心しました。それから大学がマスプロ化されたと同時にそういう精神もなくなってきたかと思ひ

ます。また新島襄先生が同志社を京都に開かれたということ、お寺とかいろいろ古いものが昔からある京都の地につくられたということとは、えらいことだと思えますし、そういう意味で、もう一度同志社における大学問題を考えていかなければならないと思うんです。

木村 さきほど和田さんがおっしゃったと同じように、新島襄先生の人間というか、新島襄先生そのものを見た場合にひじょうに熱血漢というか、そういうものが芯にあつて、それが同志社の設立の当時になっていると、キリスト教主義教育とかそういうものになつて、表現は悪いですけども、オブラートに包んだような、そういう感じになってきたかと思うんですね。たとえば、国禁を破って国外に脱出したということですね。それは現在の時点から見れば、英雄的といったら悪いんですけども、ひじょうにりっぱな行為といわれておりますね。しかしその当時の時点に立つならば、法学部であるからいうんじゃないですけども、それは法律を破ったことには変わりはないということですね。その間のいわゆる兼ね合いですね。ほんとにどこまでみずから信じてやるのか、あるいは時代のムー

ドがそういうムードで、付和雷同してそれに乗ってやるのか、新島襄先生の場合はそれをうまく切り抜けられたけれども、はたして新島襄先生の当初にあったそういう精神が、現在の同志社にうまく調和というか、妥協というか、そういう形で存在しうるかどうかわいたことがまず疑問だと思ひます。いわゆる現在の同志社は初心にかえれという場合に、それが最大の疑問だと思ひます。もちろん新島襄先生はそのあとに、キリスト教主義に基づくところの大学、あるいは皆さんがいわれているように一國の良心たるべき人、あるいは良心を手腕に運用する人ということで、人を救うというその精神は認めますけれども、初心にかえれという場合、あまりにもばく然としているのじゃないか。法秩序を破るというそういうところまで考えて、新島襄先生は真に何を考えていたか、彼の行動の現在における意義は何か、もっと深く掘り下げて考えるべきじゃないかと思ひます。

小杉 新島襄という人については、チャペルアワーとか、一年のときに授業で聞きましたけれども、そのなまの人間というのですか、熊本バンドといわれる人々になにかもめ



中村恵美子さん

事があったときに、自分の手をみずから杖で打ったとか、そういうエピソードが私たちに残されております。そういう姿を見たときに、何十年を経たいまでも、新島襄という人の人間としての魅力というものが感じられて、一年のときにすぐ感銘といいますか、感動したのをいまでも覚えております。いま私の大学生活をふり返ってみたときに、そういうほんとうに生きた人間に現実の大学においてめぐり会えなかったということが、私はひじょうに残念だと思います。

張 新島襄先生の伝記を読んでみたんですが、けれども、生徒一人一人のことを先生はひじょうに思っておられて、先生と生徒のつなが

りが強かったと思います。いまの同志社ではそれがあまり感じられないのです。私たち女子大の場合、先生一人にたいする学生数は大学にくらべると少なかったから、先生個人と学生個人とのつながりはまだしもありましたけれども、人間個人として先生とつながりある機会が、なかなかないということを聞きまして、昔はそういう点がよかったなと感じております。

岡 いま皆さんに新島襄の人物観をちょっとお聞きしたんですが、皆さんそれぞれにとらえておられるので、私ホッとしたんです。新島襄という人は、さきほど木村君でしたか、情熱の人ということを申しましたね。私は教育の場というものは、つきつめたところ、情熱がみなぎっていなければ成り立たないものだと思うんです。それがいちばんの柱じゃないか。そういった点で、明治初期の日本には福沢諭吉も含めて教育者はたくさんおりますけれども、福沢諭吉は、啓蒙思想家としてはひじょうに働いた人です。しかし教育者として見た場合に、やはり情熱において新島

島のほうが上じゃないかと思う。その新島襄の精神がいまの同志社に欠けているということ

とは、これまたいまのお話で皆さんの一致した意見じゃないかと思えます。それとも一つは、さきほど自己紹介のときに申した私のワイフの祖父の話によると、大磯から新島襄のひつぎが京都駅に着く。ちょうど雨が降っていたそうだけれども、木綿の着物に小倉の袴をはいた学生がひつぎをかついで、京都駅から若王子までその行列がつづき、みんな雨にぬれた顔をいっぱい流していたということ。一人の恩師の死をいたむ学生の涙がそれだけ流されたということ、今日の教師と学生との人間関係のなかではとうてい考えられないことじゃないかと思えますね。

キリスト教主義教育

もう一つお聞きしたいのは、同志社はキリスト教主義の教育を行なうということを標榜しておりますね。これが実際に大学の生活のなかでどの程度生きているかということですが、木村君の場合はどうですか。

木村 私の場合は、さきほど申しましたように、中学、高校と送った同志社生活において、たとえ強制されながらも毎朝礼拝に出ていたという印象があまりにも強くて、現在



和田豊司君

の同志社大学でキリスト教の何かをさがすすれば、もちろん私自身が求めているということは反省する必要がありますけれども、宗教という時間が一般教養のなかにある——くらいしか考えられないのじゃないか、極端に言えばそういうふうに通うんです。ただ、その根底に同志社の精神というものが流れているということはいえる——いいたいのですけれども、それを私自身が身をもって感じたということはなかったと思います。もちろん、大学がいわゆる真理の探究の場であるといわれるかぎりにおいて、たとえば法律学の場合にキリスト教精神というものが入ってくる余地はありませんし、もし根底にそれがあ

ったとしたら、私自身は見きわめきれなかった。それしかいいようがないと思います。

岡 大学というものは、私は与えてくれる場ではなくて、学生一人一人がみずから求めて勉強していく場だと思わなければならぬ。そういう考え方からいって、新島精神にしてもキリスト教主義にしても、求めれば得られるという雰囲気は同志社にはまだ残っているのじゃないか、残っているといういい方はひじょうに失礼かもしれないけれども、あるのじゃないかと思いますが、その点はどうでしょう。

和田 ぼくは工学部にいるんですけども、工学部のなかにも、いわゆるキリスト教を中心にして教育をやっておられる先生はたくさんあるんです。しかし外からキリスト者ということに入ってきている工学部の先生には失望を感じているわけです。というのは、同志社がキリスト教主義をとっているからというだけで、工学部のなかでも、こういういい方はおかしいかもわからないですけども、ある種の特権意識というものがあって、ぼくの目から見れば、なにが偽善者的な感じをうけるわけです。

小杉 女子大学のキリスト教研究会で、春と秋と一泊して希望者が参加するという形で四年間毎年経験してきたんですけども、そういう機会に、一晩中みなが膝をつき合っていて、いろんな問題を語りあったということ、それ自体は私にとって楽しいことだったと思っております。それに参加しようという気持をもっている人は、ごく限られた数で一〇パーセントにも満たない状態ですから、大学全体としてキリスト教が生きているかと問われたら、首をかしげずにはおられませんけれども、一部にはそういう形で残っています。

張 私の場合、中学、高校のころ強制的な形で礼拝に出たわけですけれども、大学へ入ってから、なにかキリスト教を身近に感じなくなってしまうと、礼拝は毎日ありましたが出なかったし、いま小杉さんがおっしゃったような研究会にも、結局出ずにじまに終わりました。その時点においては、なにかほかの行事と重なってしまっていて、自分にはほかのほうがいじだと思っていなかったのですけれども、せっかくそういう機会があったのに出なかったのは、いま残念に思っております。

新島襄先生が生きていたら？

岡 ちよつと角度を変えまして、もし新島襄先生が生きておられたら、いまの同志社をながめてどう思われるでしょうか。

谷口 本人でないので（笑）。やはり同志社のとくに大学のなかで、教育というものがほんとに存在するのかが一つあると思います。全学闊とか神閣委なんかがそういうことをいつてきたわけですけども、いまの同志社大学では、文学部、神学部、工学部はたくさん金を食うといわれて肩身の狭い思いをするわけですが、そこにあるのは資本の論理です。それと同志社のいわゆる事務官僚が何の場合でも出てきてやっている。これではんとうに教育というものがあるのだからかということ、を、なげかれると思います。

池田 新島襄先生がおられたら、いまの大学の状況を見て嘆かれると思います。いまのマスプロ教育にたいして、学生と教師のものと密着した教育を考えられると思います。

木村 大学は教育の場か、それとも研究の場か、すなわち学生の側から見て、受動的になるのか、それとも逆に積極的に出ていくの

かという点ですが、大学というのは、単なる両者の調和だけであってはいけないのであって、大学院の場合は、みずから研究するという積極的な面が前に出てきますし、それに比べて大学というのは、高校のように教育一本ではいけない。その意味で中途半端でありまして、その点の兼ね合いにたいして、ちよつと疑問をいだいているんです。新島襄先生が現在出てこられたら、この状態だったら、もう一度一からやってやろうと思われるのじゃないですか。たとえば、これはあとから少し問題になると思いますけれども、あの狭いキャンパスにあれだけの人数がいるということ自体についても、どこかへ移って、そのあとで一からやろうというふうに思われると思いますね。

中村 私も嘆かれると思うんです。昨年封鎖がずっと続いたわけですけども、学生が学校側にいちおう問題提起をしたわけですね。でも、それが全然答えられていないままに封鎖が解除されてしまった。英文科の人から話を聞いたんですが、英文科の場合、卒論を書く人は、学年四百人ほどのうち二十人くらいだそうです。それは書きたい人が書くの

じゃなくて、卒論を書く人を教授会にはかって選ぶのだそうです。そういう問題も全然解決されないままに授業が再開されたわけですね。それで学校側がどういうふうに教育しています。こうとするのか、教育にたいする姿勢にすごく疑問を感じております。一月二十三日に集会を開いていたら、学校側が中立売署から機動隊をよんできて、四十数人が逮捕されたという話を聞いたんですけども、ずいぶんひどいなと思ったのです。言論の自由とか集会の自由は憲法で認められているわけで、そういう最低限のことが学内で保障されていないということに、私は疑問を感じております。

同志社のリベラリズム

和田 その点は全く同感で、たとえば一月二十三日の出来事なんですから、うちの研究室内の掲示板に、それにたいする抗議文を貼っているわけですね。そうすると、毎日夜なかのロックアウトの間にはがされるわけですよ。結局抗議しているということも抹殺されるという状態がいま起こっているの、同志社のリベラリズムはどこへいってしまっ

たのかと、ひじょうに残念に思っているんです。

木村 その同志社のリベラリズムという場合、はたしてどのようなものをリベラリズムというのか、お聞きしたい。というのは、いわゆる大学も一つの社会です。さきほどいわれたように、たしかに言論の自由とか表現の自由は憲法で保障されている。それは認められますよね。しかしながら、同志社もまた一つの共同生活体であると考えた場合に、たとえば一月二十三日の時点においてあのような集会を開くということは、授業しているものにとつては、はなはだ迷惑ですね。それから同志社は、治外法権の場でないということ、



木村博一君

学問の自由は認められるけれども、けっして治外法権ではないということを考えるならば、最小の規制は法的な観点からも必要じゃないかと思えますね。そして同志社のリベラリズムというのは、同志社という共同生活体、同志社という一つの社会のなかでのその制約のもとにおけるリベラリズムではないかと思うのです。やりたいほうだいやるというのは、けっしてリベラリズムじゃないと思うんです。

和田 ぼくもそう思いますけれども、ただそこで問題になってくるのは、大学のあり方とか、そういう根本問題にふれなければ、表面で起こったことだけで、はたして自由なのか自由でないのか、ぼくは答えられないと思うんですよ。そういう位置づけをやったうえで、大学にどのようなことが許されているのか、何をすべきか、こういうことは不法じゃないかと、その辺を深く考えていかなければいかんと思います。ただ単にいまの社会秩序を破るから、あるいは破るような発言をするからだめだとか、そういうようなことではなくて、大学自体の存在する大きな理由を考えて、そのうえでまちがっていることなら

まちがっている、研究しなければならぬこととなら研究していく、そういう方針をいま同志社のすべての人が考えていくべき時じゃないかと思うんです。それでリベラリズムというのは、ぼくはある意味ではあいまいさを伴った、外面から見たら甘やかしであるという意味が出てくると思いますけれども、そのあいまいさがぼくは同志社の一つのよさのような気もするんです。

木村 いま和田さんのおっしゃっていることを聞いた場合に、こんなことをいっては失礼なんですけれども、ある意味で逃げておられるというか、うまくいいわけをされているというふうに感じるんです。目的と手段ということがあるでしょう。目的と手段とはいかなる手段をとってもいいということにはなりません。現在同志社にリベラリズムが存在するという場合に、あくまで目的としてというか、目的の根底に流れるものとしてリベラリズムを求めるのならよろしい。ただし手段をとる場合に、目的が正しければ手段は正しいという一義的な考え方において、ああいう一月二十三日の集会等は、私は非難すべき余地があるんじゃないかと思っている

んです。

岡 その話はそれくらいにしておきまして、だいぶん皆さんから同志社の現状についてきびしい意見が出たように思えます。そういうきびしい意見が出るということは、また半面、同志社が長い伝統をもっている。歴史の重みこいうものは、しばしばコレステロールの役目を果たすのじゃないか。そういうところに、新島精神が、いろいろゆがめられたり、あるいは形骸化して伝えられている面もあるだろうし、またキリスト教主義教育というものもお題目だけに終わってしまっている面もあるだろう。しかし、最初に戻って、ともかく豊かな人間関係が同志社の生活を通じて結ばれたということは、これは皆さんの一致した意見です。学園生活を送っていて人間関係の疎外ということは、むしろほかの大学あるいは高校では問題になるわけですが、その点、同志社の一つの伝統のよさ、それは和田君あるいは木村君の表現によると、あいまいさということになるかもしれないけれども、あいまいさであったとしても、その底に流れているものは、ひじょうにヒューマンなものじゃないかと私は思うのです。だけど、

なんといつても時代が今日のように技術革新を中心にして、人間の生活が家庭のなかまでいやでも応でも革新の波に洗われていかなければならないような時代になっておりますね。そのいう時代に対応するだけの構えが今日の大学にあるかどうかということなんですよ。

紛争から得たもの……

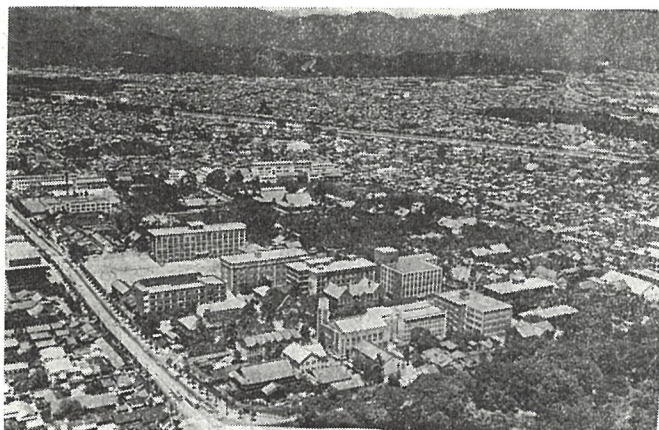
そこで、皆さんは昨年紛争を経験された。この経験は、これから社会に出ていく場合にひじょうに生きてくるものじゃないかと思うんです。人間関係をみつめる場合にも、われわれの人間生活を物心両面からながめる面において、かなり大きなプラスになると思っています。その点どうでしょう。

谷口 やはり自分自身がものを考えるというときに、この経験はたしかに大きなものだと思うわけです。ただ、よく自身は神学とかキリスト教をやっているわけで、具体的に問題になるのは教会の問題ですけれども、それを大学といいかえても、わりあいすつとのみこめると思うんですね。そこで問題になるのは、ゲマインシャフトとゲゼルシャフトと

いういい方があると思いますけれども、ゲマインシャフトとしてのいわゆる学問をする場、真理を探究する場、それはある意味では教会とか教団というふうにいいかえてもいいと思うんですけれども、それとゲゼルシャフトとしての具体的にここに存在している同志社大学、そういうものをいかなる形で結びつけていくのかということが大きな問題だと思わわけです。それをほんとうに徹底して問題にしていかないかぎりは、同志社大学は大学であって真理探究の場であるという形でポーズをとった一つの理想像に終わってしまうだろうし、またゲゼルシャフトだけであると断定することも、よく自身はそこまでいい切ることはできないわけです。その二つの関係を徹底して、相似なものが結びつく根拠とか、そういうものがいかなる形で結びつくのかという課題を、同志社はやはりになっていると思うわけです。

中村 私はこの経験のなかから、生きていくために自分のなかの良心を売り渡すようなことをしてはならない、そういうことをすごく感じました。

岡 もしも紛争がなかったら、人間関係と



いうものをそれほど突きつめて考えなかったのじゃないか、あるいはその他の大学を中心にした社会の問題についても、紛争を通して、たとえば講義はたしかにできなかったけれども、逆に講義以上のものを得られたので

はないか、そういう点をお聞きしたい。

和田 ぼくには一つの転機になったことなんでしょうけれども、いままでの既成概念とか、そういうものがごとく打ち破られていくなかで、自分自身を変革する力とか、ものを正しく見る目、批判の目が、たとえば左のほうから見たり、右のほうから見たりするという形によって養われたという面では、ひじょうに役に立ったと思います。とくに自分自身がいままでのように考え、どういう行動パターンをとっていたかというようなことは、封鎖前ならちよつと自分で考えられなかったことなんです。そういう面で役に立ったと思っております。それと、ひじょうにエスカレートしたことが起こって、それに対処していくなかで、いろんな先生といろんな問題について話し合い、学生のなかでも討論していくということで、かえって逆に失望を感じるころもあったのですけれども、人間関係でいえば、広範な人の意見を聞き、また友人関係、よい先生とも接触する機会を与えられたということは、やはり封鎖のおかげだったと思います。ただ、それによって研究とかそういうことがおくれたことは事実です。

岡 逆の意見はありますか、紛争は結局マイナスだったという意見は……。

池田 ぼくはマイナスだけだったとは思いません。紛争がなかったら、ぼくは平均的同志社人であったかもしれない。こんどのごときは体育会も一丸となって対策を考えた。体育会はある程度の組織でし、一・二三ストのときなんか、みんな泊まりこんで、体育会の果たす役割をいろいろ考えて、対策にあたっていたわけですけども、そのときなんか、体育会が一体という感じでした。そういうことから、われわれは封鎖のおかげでお互にかたまったということはいえると思います。

木村 私の場合、紛争の意義を認めるかどうかということより、ある程度これは先入感として紛争というものに反発をもっていたこともたしかにあるんです。ただその場合、私もクラブ活動をやっておりまして、さっきいいましたように法律相談を開いたんですけれども、それが七月の末から八月のはじめという、すでに紛争が始まったあとなんですね。しかもそれは先生方にも来てもらわなければ、とても私たちだけではできないという行事でしたので、はたしてこのような事態で

遠くへ出て行ってクラブ活動をやることは、同志社人として紛争から逃げるものなのか、それとも紛争は紛争であるけれども、少なくとも私たちが真摯な研究をあえて世に問うというか、そういう行事をもつことが紛争にたいする一つの批判として積極的な意味をもつものなのかということで、クラブ内でも議論があったんですけども、それも一つの紛争解決の手段である、たしかに、同志社は紛争を行なっている。しかしながら、こういう研究も行なっている。もちろんその場合、紛争をまったく否定するわけではなくて、こういう解決の手段もあるということで行事をあえて決行した。その間において、クラブ員同士のなかにおいても、あるいは先生方との間においても、多くの対話をもてましたし、行なったこと自体についてもある程度の意義があったと思っております。とくに地方の校友会の方々にひじょうに喜んでもらいまして、おまえのところも紛争をやっているらしいが、こういうやつもいるのかといって喜んでいただいた。もちろんそれをそのまますなおに聞く人間もおりますし、それに反発をもつ人間もありましたけれども、そういう評価を得た

ということですね。それも私は一つの意味があったと思っております。もちろん人間関係という面においても、紛争を契機として紛争にたいする態度のなから一つの人生的な教訓を得たと思っております。

岡 たしかに紛争そのものについては、皆さんそれぞれ考えがわかれるだろうとは思っています。しかし、この紛争を通して世間の目が大学そのものに注がれたということ、そして大学自身がいろいろいままでたまっていたコレステロールからなんとか脱け出そうと努力する糸口になったということ、そういう点では、私は学園生活のなかで紛争を経験したということは、いろんな意味でプラスにもなったし、また世間の人にもひじょうに勉強になったんじゃないかと思うんです。大学のあり方などということは、もしも紛争がなかったら、新聞も雑誌もあまり取り上げなかっただろうし、なんとなく大学は全国に八五〇あまりあって、伝統のある大学ほど結構なんだというようなことでずっと過ぎてきただろうと思います。それが伝統のある大学はそれなりにいろいろ考えなければならぬということと、これを世間に知らせた点は評価すべきで

はないでしょうか。そこで大学のあり方という点で女子大生の方にひとつお聞きしたい。ここ数年來、女子大生亡国論というものが盛んにいわれましたね。それについて張さんはどうお考えになりますか。

『女子大生亡国論』

張 大学で四年間学んできたことが實際社会に還元できるかどうかという問題がありまされども、職業婦人として働いていくという考えは、女子大生のほんの一部にしかないと思っています。けれども、大学四年間で得てきたものの考え方とか、そういうものは家庭のなかでも大いに生かしていけるし、家庭のなかで生かしていつてこそ、次代の人たちの育成のためにも役立てることができるのじゃないかと思えます。だから、女子大生亡国論といまいわれましたけれども、やはり女子も大いに学ぶべきだと思います。

小杉 女子大学にいながらこんなことをいうのは、ちょっと自分自身矛盾を感じるのですけれども、女子ばかりの大学がかつてあったわけですね。同志社英学校ができたすぐあとに女学校ができて……。

岡 明治十一年に同志社女学校ができています。

小杉 そのころ女子のみの教育が必要とされたという、その当時の事情はわかるような気がするのです。男女の差というのですか、男子と女子との生きる道といえますか、社会的になにかひじょうにちがうというふうに思われていたからこそ、女子のみの教育が必要というところから女子大学ができたのじゃないかと私は思うのです。そういうことから考えていったら、いまでも、女子大学がほとんどできているという現状を見たときに……。

岡 それは必要でできているのだろうか。

小杉 私は、どこに必要性を見出してつくられているのかと思うのです。私は、大学というところは技術を修得するところとか、そういうふうにとられたくはないし、実際そういうふうにとらえないんですけれども、やはり学ぶというところから、自己が足りかえられるというんですか。そういう点を考えるんです。共学の大学に入れなかったから女子大学に來たという人が実際は多いわけですが、そういうふうと考えたら、レベルダウンしたところが女子大学だということにな

る。女子大生のなかでもそういうふうにとらえている人が実際多いし、事実その点は、残念ながら私も認めているわけなんです。ですから、亡国論が出たということも、私はなにかわかるような気がするし、じつさい女子大学の四年間を経てきて、その人が入学したときと卒業するときと比べて、どれほど成長してきたかということを見ても、首をかしげたくなるような現状が女子大学のなかにあると思っておりますから、女子大学自体の必要性というのは、私自身あまりわかりません。疑問をもっております。

岡 いわゆる「女子大生亡国論」というのは、女子大のあり方とはちょっと別な問題ですね。要するに男女共学の大学に女子学生がほとんどふえてくる。文学部の場合は、同志社の場合でも絶対多数が女子学生じゃないですか。そういうぐあいになっていくと、文学部の場合、研究の後継者の養成もできない。しかも、女子学生が卒業後みな家庭の主婦になってしまったら、文学部でいろいろ学んだこと、あるいは研究したことが、なにも社会に還元されないじゃないかという考え方、これは慶応の池田弥三郎さんとか、早稲田の呷

岐康隆さんとかいう人がいいだしたことだけれども、それには共鳴する人も多いわけですね。中村さんの場合、卒業して職業につくわけですか。

中村 私、いまのところきまっておりますけれども、できたら何かしたいと思っております。いま女子大生亡国論が出ておりますが、広い意味で考えたら、ものごとを考える人間をつくるという点で、私、女の人はもっとどんだん大学に入って勉強したほうがいいと思うんです。そういう人が家庭に入ったらといって、考えたことが全然むだにはならないと思うんです。子供の教育一つとてみても、いまの教育ママのような方針でなくて、ほんとうにものごとを考えられる人間をつくれると思います。母親として子供をじょうずに育てられると思います。

岡 わかりました。いまの中村さんの意見、さきほどの張さんの意見、私は賛成なんです。結局女子大生亡国論によると、社会的に還元できないからということなんだけれども、そんなことをいって、女性が全部スペシァリストの道を行って職業についてしまったら、男はいったいどうしたらいいのかという

ことにもなってくる。私は、やはり一般的に
いて女性の場合は家庭に入ることが自然だ
と思うんですけどね。明治三十四年とい
うのは二〇世紀のはじまった年なんです。一九
〇一年なんですが、そのとき報知新聞が、二
〇世紀の予言という続きものをやっている。
そのなかで、二〇世紀がどんどん進んだら、
日本にどんな社会が生まれるかということの
一つに、「男女とも大学を出ざれば一人前の
人間とは遇せられざるべし」という意味の一
項目があるんです。いまでいえば未来学の対
象みたいなものなだけども、まさに今日
はそういう時代にだんだん近づきつつあるわ
けですね。だから大学を出たればなにか職業
につかなければ、ということとは、必ずしも私
はいえないと思うんですが。

新しい「同志社像」

さて、皆さんの話を伺っていますと、同志
社の現状にたいしておもしろくない点をだ
いぶんあげられた。といって、いちばん最初、
同志社に学んでよかった点をあげられたこと
から思うと、同志社で学生生活を送ったこと
にたいする喜びはたしかにあるわけですね。

それと同時に、同志社は現状ではない、
新しい同志社像を生み育ててほしいという後
輩への願いがあると思うんですけども、そ
ういう点で新しい同志社像はいいかどうか
という結論が、さっきまでの話に出てきま
したね。そこへ話をもっていきたいと思うん
です。

木村 現在、とくに同志社大学というもの
を考えた場合に、総合大学としての同志社を
中心に重点を置いていこうな感じですね。
いわゆる「同志社」でなくともよい、総合大
学であればよいという感じで現在のマスプロ
大学としての同志社が育ってきたと思うん
です。しかし、あくまでもキリスト教に基づ
いた大学ですから、これからキリスト教主義に
重点を移していくべきじゃないか、キリスト
教主義の大学としての独自性を出していくべ
きじゃないか、そこにおのずから同志社とし
ての歩むべき道が開けてくると思うんです。
具体的にキリスト教主義大学とはどういうも
のであるか、私自身ほかの上智大学とか青山
学院、関西学院というところを見たことがな
いので、はっきりわかりませんが、な

にかしらもう少しちがった方向、ちがった色
彩が出てきて、そこではじめて同志社の独自
性、同志社という大学の存在意義が出てくる
のじゃないか。いまのままの総合大学なら、
ほかのマンモス私学にまかしておけばよいの
で、なんら同志社として存在する意義はな
い。あくまでもキリスト教主義というものの
独自性をより以上に出していくべきじゃな
い。抽象的にしかいえませんが、い
か。おうそういうふうと考えております。

和田 ひじょうにむずかしいことで、その
問題については、いまばかりも研究会を開
いて、これからあるべき姿を模索している段
階なんですけれどね。ぼくはいまの意見とち
がって、やはり総合大学として存在する必要
があると思いますし、そういう意味では、た
とえば理学部とか医学部、それから語学とか
いろんな学科をふやすべきだと思います。そ
れはマスプロとはちがった意味ですね。や
はり総合的であり、かつ学部ごとの批判を受
け入れ、そのなかにおける連帯とか、そうい
うことも兼ね備えられるような総合大学、も
っと完成された総合大学にいく必要がある
と思います。そのなかで経営的な問題にな

ると困るんですけれども、人間が多いのは、必ずしもばくは悪いとは思わないのです。ただいえることは、いろいろな特権意識を捨てるべきだということにおいては、ばくはそれを着実に実行してもらいたいです。ある種の特権意識があるから、いまの大学の進歩が阻害されているような気がするんです。

岡 特権意識というのはどういふものですか。

和田 いわゆる私学同志社というりっぱな大学であるとか、こういう伝統にのっとってやっているのだとか、そういうものが強すぎで……。

岡 伝統のうえにあぐらをかいてしまっているということ？

和田 伝統だけじゃなくて、やはり一つのエリート意識みたいなものがあると思うんですよ。とくに教員のなかにおいてということなんですけれどね。そういうものから脱け出して、いわゆるさきほどの新島襄じゃないですけれども、もっと情熱的に考えて、人と人との交わりとか、そういうもののなかからほんとうの教育のできる場をつくっていかねばいけません。どっちかといえば、閉鎖的な

社会から開放的な社会へというか、そういう大学にしていかなくちやいけないと思います。

池田 ばくは同志社でなかったらできないような教育をやっていくべきじゃないかと思えます。われわれは私学ですし、官立の大学に右へならえのような形をしなくても、新島襄先生のいわれたように、知育だけにたよらず、徳育と体育を生かした大学をつくっていただきたいと思うんです。

谷口 さっき同志社のなかに教育があるかどうかということをみんないったわけですけども、それと同時に木村さんがいわれたように、教育と学問というものをどういう関係に置かかという問題になると思うわけです。

その場合とくに必要になってくるのは、たとえば、よく知らないんですが、いわゆる天体というものと原子とか素粒子とか、そういうものの研究がひじょうに密接な関係になってきている。それからいままです哲学関係の分野であったものが心理学、医学なんかと結びついて、人間科学という領域ができてつあるというようにことがあるわけです。いろんなものがどんどん変わりつつあるときに、現在の

学部の壁というものにひじょうに問題があると思うんです。そういうことで、開かれた大学といひながらちつとも開かれていない。そういうものをまず回復することが一つ必要だと思えます。もう一つは、やはり学問というのは、けっしていままですの学問をそのまま踏襲することではなくて、否定を通して次の新しいものを生み出すことができると思うわけです。全学閥の諸君がそういう否定の論理をもち出したかぎりにおいては、ひじょうに正しい指摘だと思ふわけです。しかし、全学閥の諸君が否定性の論理に自分自身をゆだねたときに、彼らは自己否定ではなくて自己肯定の道を歩んだと判断するわけです。学問である以上は、否定性というものはたえず必要だと思えます。それは学問の分野においても、政治や経済の分野においても、具体的には日本の体制を相手にしたときでも、否定性は必要だと思ふわけです。その否定性の論理を同志社はこれからどういふふうによりに内在化していくか、それをほんとうに考えない間は、教育というものも考えられないし、同時に学問というものもちよつとあふない感じがするわけです。

小杉 大学というところは研究の場、学問

を追究する場であり、また教育の場であるというふうに、分けてしまうことはおかしいのですけれども、現状はなにか分離してしまっているように私自身思うのです。研究の場といっても、教授なんかに個人的に接していても、知識の切り売りというか、問いにたいしては答えてくださるけれども、先生自身がちつともわかっていないというか、その意味で、教育というのはとくに学ぶというのですか、そういう場が欠けていると思うし、それをこれからの同志社にたいして望みたいと思うんです。

中村 私、和田さんのご意見とだいたい同じなんです。

張 私の場合、卒論の研究で、小人数の実験をやって、先生とすぐ密接に、ともに問題にぶつかり、ともに考えて進んでいったんですけれども、そのときにいちばん大学生活を送れたなという感じをうけたんです。そういう先生と学生の密着した教育がもっともつとふえていったらいいなと思います。

「組織社会」にでていくにあたって

岡 いまの同志社のいだいている一つの問

題は、マスプロ教育をいかにして人間的なものと結びつけるかということじゃないかと私は思うんですけれども、しかし、それじゃこのマスプロ教育を昔のような塾教育に戻して、そして社会との対応のなかで人間教育の成果をあげられるかといったら、私はけっこうそうじゃないと思う。時代の流れは、すべての面にわたって、好むと好まざるとにかかわらず、マス化していくんじゃないかと思うんです。今後ますますマスプロ教育は時の勢いとして進んでいく。私学の場合、国立と比べて国家の補助はなけなしだ、だから、私学はどうしてもたくさんのお金をとらなければならぬという問題を別にして、時代の流れというものを私はそういうふうに考えています。ところが、皆さんがこれから出ていく社会、就職していく社会というのは、いよいよ組織が巨大化しつつある社会なんです。ある意味では競争社会であり、ひじょうにえげつない社会です。東京に行くのに、わらじをはいて杖ついて何日間かかったという時代と比べたら、今日では出張といっても三時間十分の新幹線を利用して日帰りで行ってこい

ということになる。出張の中に旅の楽しみはない。和田君も木村君もそんな生活を経験することになるわけだ。そういう人間が疎外されがちな、群衆のなかの孤独という感じをいだきがちな社会にこれから出ていくにあたって、皆さんの決意を最後に一人ずつ伺いましょう。

池田 われわれが出ていく組織社会は、全然想像もつかないところです。これはぼくだけではないに、体育会全員の意見ですけれども、われわれが鍛えた根性とバイタリティと肉体とで、がむしゃらにぶつかっていくよりほかに、がむしゃらにぶつかって、はじましていくんじゃないですか。そのがんばっていくことが後輩のためにもなるし、自分のためにもなるし、さすが同志社出身者だといわれるようになりたい。そういうわけなくても、自分で満足できるようにしたい。

谷口 ぼく自身は、大学も組織だといわれればそれまでですが、具体的には。大学院をめざすわけですけれども、そこで自分自身の決意としては、一方では自分自身の問題意識を徹底し先鋭化してぶつかっていくことでしょうね。それからさっきいったように、この

社会にたいして、同志社のいまの状態にたいして、たえず否定の契機を自分自身のなかに内包させていきたいということを考えます。それがいちばんの決意なんです。

小杉 私の信条というようなことではないんですけども、大学院にいても、大学を出ても、自分にたいしてと、それから一般的にいわれる社会というものにたいして、見る目と聞く耳をつねにもっていききたいと思います。

張 私の場合、これから家に帰って、結局家庭のなかでの生活というものが中心になってくると思うんですけども、何事にたいしてもつねに誠意をもって接していききたい、そういう気持です。

和田 ぼくは巨大企業といわれる社会に就職が決っているわけなんです、自分自身まだ就職する気になれないし、社会に出ることに躊躇しているわけなんです。そういうなかで、いま谷口君がいわれたように自己否定していくなかから、自分の可能性を最大に生かせる社会を創造していくような仕事をしていきたいと思っています。現実の社会は、いままでの大学とまるきり逆の方向に進んで

おりますし、可能かどうかわかりませんけれども、自分の可能性をなんとかしてひろげたいという気持で社会に出ていくつもりです。

中村 私はこれから家に帰るわけですけども、自分がどんな立場におかれても、自分を見失わない、そして心のやさしさとか、思いやりをもった人間になりたいと思っております。

木村 私の場合、とくに就職にあたりまして、いろんな企業の方とか同志社の先輩の方々に会っていわれたことは、同志社の出身者は変に世間を知っている。したがってあまりにも丁重で、あまりにも小さく固まってしまった人間が企業のなかにおける同志社人だ、しかも使いやすい人間と企業から見られがちな人間が多いということをいわれました。だから、まずそれを破りたいと思いますが、何よりも自分の限界を知ること。いままで同志社の温室育ちで十年間ぬくぬくと育ってきましたので、とくに自分の限界を知ることが決意であり、また期待なんですけれども、そのあとではじめて自分の可能性を伸ばす道を見出していく。組織社会に出るにあたって、まず自分の限界を知るという方向に

力を注いでいきたい、そういうふうと思っています。

岡 私、最後に申し上げたいのは、組織化社会のなかでは、往々にして生活が惰性に流されてしまいがちです。これはこうだからこうだという論理に支配されてしまうのです。昨日の連続が今日であって、今日の連続が明日だということになってしまいうわけです。そこでひとつ皆さんにお願いしたいのは同志社に学んだという誇り高い同志社人であってほしいということ、もう一つは、いまのことばでいえば、自己解体を日々つづけていくように努めてほしいということ。これはそれぞれの組織に入って仕事をする場合にもそうだし、家庭で主婦の座につかれる人にも必要だと思います。自己解体をつづけていくかぎり、そしてたえず自分を組み立てていくという努力をつづけていくかぎり、いくつになっても古ぼけた人間になってしまふことはないでしょう。そしてつねに新鮮な気風をそれぞれの場で発揮し、注入していくのが同志社人の役割じゃないかと思うしだいです。